

## 不登校生徒の合宿体験

— 「ヨコ体験」合宿のこころみ —

池田博和 吉井健治<sup>1)</sup> 桐山雅子<sup>2)</sup>  
長野郁也<sup>3)</sup> 石田智雄<sup>4)</sup> 長峰伸治<sup>4)</sup>

### I. 問題と目的

現代の学校生活においては時間の枠、空間の枠、活動内容の枠（カリキュラム、校則など）といった「学校枠」が硬直化し柔軟性を失っている。このような学校構造の硬直化と相俟って、教師は「学校枠」に生徒を順応させることに力を注ぐだけで、生徒の特性に応じて柔軟に対応することが困難になっている。もちろん、生徒に学校枠という現実原則を呈示して、それへの適応力をつけていくように促すことは生徒の心理発達上において意味があり、さらにそれが生徒の社会性の獲得につながることは確かではあるが、しかし学校の持つ現実原則そのものが現代社会においてどのような意義があるのか疑わしいものが多い。たとえば数百人が整然と集団整列をすること、計算や楽奏を強迫的なまでに練習することなど枚挙に暇がないのであるが、それらははたして今日における社会性の獲得を前提とする現実原則であろうか。これらは、学校が歴史のある一時期に、集団主義や合理主義、学歴主義といった何らかの社会的要求に応じた意味を持って形成されていった結果に過ぎないものであって、常に変化していくことが必要である。今日では、時代や状況、生徒の特性に応じて変化していく柔軟な構造が学校に求められている。教師は、硬直化した学校構造の中で、学校特有の無意味な現実原則に疑いをもつことなくそれを絶対視して、生徒に押しつける傾向がみられ、そこでは個々の生徒が抱えている心理的課題の解決は困難になっている。

このような学校環境の中で適応できなくなった生徒が、不登校のある一群を形成していると思われる。もちろんすべての不登校生徒が学校環境の問題に起因するのではない。どのような環境であっても不登校を呈する

生徒がいることは否定できない。ここで焦点をあてようとしている不登校生徒は、学校環境と生徒のパーソナリティとの相互規定的関係によって不登校となっている者である。たとえば過剰に厳格な父親をもった生徒が、同様に厳格な男性教師に向かって父親転移を起こして、その結果教師を嫌って不登校になったと考えられるような場合である。その解決には2通りあって、個人治療によって生徒の内的な対象関係を扱うか、それとも教師の対応を変えるかである。当然、学校では多くの生徒が教師に何らかの転移を起こす可能性は高く、このように教師にネガティブな父親転移を起こして学校に行きたくないと感じる生徒もいるはずである。しかし、多くの生徒は特に仲間関係の中で自己の力を貯えることによって、非常に厳格な教師に立ち向かっていったり、あるいはうまく回避するしたたかさを身につけていくのである。仲間関係の中で生徒の自己治癒力が十分に発揮されているわけである。このようにして生徒は、自己の成育歴からくる心理的課題を、主として仲間関係のなかで解決していくのである。もちろんそこでの解決が不可能な生徒は心理治療が必要になる。

ところが、先に述べた硬直化した学校構造においては、仲間関係の中で生徒の心理的課題が解決される可能性が低く、生徒は心理的に癒されることもなくむしろますます傷ついてしまうのである。現在、不登校とレッテルをはられた多くの生徒の中に、硬直化した学校構造の下で自己治癒力が十分に機能し得なかった一群があると思われる。この一群に対して個別の心理治療を行なうならばそれなりの効果はみられるであろうが、しかし今日の不登校生徒の増加に対応できる個人治療の時間的および労力的限界がある。またそのような実際の問題のみならず、心理臨床の社会的貢献という意味において、個人治療から見出された学校構造の本質的問題を明らかにしてその知見を学校教育に還元していくことは、心理療法家にとって重要な仕事である。

このような不登校生徒には、心理的課題を乗り越えていく力をつける場、心理的傷つきが癒される場、あるいは

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程
- 2) 名古屋市治療教育相談センター
- 3) 名古屋大学医学部精神医学教室
- 4) 名古屋大学大学院発達臨床学研究科博士前期課程

は「停滞」から「流動」へと向かう推進力を与える場が必要である。彼らは、あらゆる集団状況からの全面退却ではなく、自己の成長が見い出せない場から、あるいは自己の傷つきが癒されない場から選択的に退却しているのである。彼らにそのような成長が可能となる場を提供すれば、自らその場に主体的に参加するようになることは明らかである。このようなところがすでに、公立の相談センター、登校拒否生徒の高校である「生野学園」（生野学園図書出版局、1992）、「東京シュレ」（奥地、1991）、その他の塾やフリースクールにおいて始まっている。そこでは、仲間関係が彼らにとって重要な意義を持つことが示されている。このような機関や施設などは硬直化した学校構造に対するアンチテーゼという側面があって、今後学校はそこから得られた知見を取り入れそして統合していくことによって、学校が生徒の成長と癒しの場へと変化していくことが望まれる。学校不適応対策調査研究協力者会議報告（文部省初等中等教育局、1992）は、「学校が児童生徒にとって自己の存在を実感でき精神的に安心していることのできる場所——心の居場所——」（P. 18）を提言し、民間施設のガイドラインを提示して不登校の問題に学校外施設等の意義を認めている。このような教育行政の柔軟な態度によって、硬直化した学校構造は今後変化していく可能性をもっているように思われる。

不登校生徒の本質的問題として、先の機関や施設で重視されているのは、仲間関係のあり方である。同様に、長年われわれは個別心理治療を中心として不登校問題にかかわってきて、仲間関係における心の成長と癒しという視点の重要性に気づくことになった。そして、それをわれわれは「ヨコ関係」と呼ぶことにした。詳細については別の機会に譲ることにするが、その要旨は以下に述べることである。不登校は、青年期危機として捉えられ、その心理的問題の特質は、時間的構図からは「生成の停滞」であり、また空間的構図からは「タテとヨコの均衡の崩れ」である。その二点を統合すれば登校拒否の本質的問題は、「狭さと虚構の上下に縛られた軌跡としての生成の停滞」であって、特にその中核的な問題には「ヨコ関係への発達における挫折」がある。そこから導かれた治療論は、まずは庇護された空間において不登校生徒の「ヨコ関係の広がり」を展開させて、そしてタテとヨコの均衡の回復へと進んでいくことである。

そこでわれわれは、このような論からの直接的な展開としてのところみである「ヨコ体験」合宿を実施するに至った。本論文では「ヨコ体験」合宿における個人の体験やグループの展開について詳細に記述し、そこから不登校生徒にとっての「ヨコ体験」の意義を検討すること

にしたい。

## II. 方法

われわれは、合宿に先立って2ヵ月前から毎週、のべ10数回にわたる事前学習会を開いて、合宿プログラムの検討、合宿の運営事務、不登校生徒の心理や集団精神療法に関する学習、ファシリテーターの関わり方についての討議を行なった上で、合宿の全体を企画した。

合宿は、「ヨコ体験のつどい」という名称で、1992年3月28日（金）から31日（火）までの3泊4日、「愛知県旭高原元気村」を中心として、合わせて「旭高原少年自然の家」の施設を利用して実施した。

### 1. プログラム

合宿のプログラムは、図1に示した通りである。第1日目は、ファシリテーター主導によるゲームやキャンプ・ファイヤー等の構成的プログラムが生まれ、それを通して楽しい雰囲気づくりがなされる。それは、構成された状況から出発した方が、メンバーの集団参加への抵抗が軽減され、また楽しい雰囲気を味わうことによって期待を膨らませることができるからである。特に活動性の低いメンバーや対人緊張の強いメンバーにとって、このような構成的課題の方が参加がスムーズである。

第2日目からは非構成的な方向へと移行して、比較的自由度の高い課題の中でメンバーの主体的な行動を引き出すよう計画されている。

第3日目は、まったく非構成的であって、メンバーの主体性が徹底的に尊重される。ただしそれは、メンバーが好き勝手にやるという放任の意味ではなく、メンバーの自己決定を尊重し、またファシリテーターと共に考え行動するということである。この第3日目はメンバーのさまざまな行動化が出てくる、いわば要注意の日であると予想される。

第4日目の最終日は、作文やまとめの表現などの構成的課題を行なう。第1日目の課題は一方向的に与えられるプログラムであって強制力をもっていたのであるが、この日はそれとは異なって、メンバーは構成的状況にいなながらもファシリテーターとの関係の中で主体性が尊重されていると感ずることができる。

このようなプログラムは、4日間を通して「課題中心」ではなく、いわゆる「人間中心」として実施されるのであって、プログラムの進行が優先されることはない。メンバーの人間関係についても、はじめのうちは小グループでの関係を深め、次第に参加者全体の関係に広げていくことがねらわれている。

原 著

7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
3月28日(土)		集 合		バス 移動	昼 食	出会うのゲーム				夕 食	入 浴	キャンプ ファイヤー				就 寝	
7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
3月29日(日)	起 床・洗 面	朝 食	ハイキング (雨天時：体育館)				工 作	野 外 炊 飯				入 浴	部 屋 遊 び	就 寝			
7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
3月30日(月)	起 床・洗 面	朝 食	自 由 遊 び						荷 物 の 移 動	入 浴	パ ー ベ キ ュ ウ	大 屋 敷 で 部 屋 遊 び					
7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
3月31日(火)	起 床・洗 面	朝 食	ふりかえりの会			昼 食	お 別 れ 会	バス 移動	解 散								

図1 「ヨコ体験のつどい」プログラム

2. メンバーの募集と事前面接

メンバーの募集については、名古屋市およびその近郊の中学校 167校と高校89校、児童相談所9カ所、不登校生徒の民間施設7カ所にポスターとビラを郵送配布し、また新聞やラジオで案内を行なった。受付は、名古屋大学教育学部心理教育相談室へ電話で申込み、その際に事前面接の予約日を決定することとした。

合宿に先立って本人と親に事前面接を実施して、親には登校拒否の状況、生育歴、家族関係、合宿に関する注意項目（身体の健康、食事、生活習慣）について尋ね、また本人には合宿への期待、不安について尋ねた。このような事前面接を行なうことによって、合宿参加への抵抗を軽減することもできる。とりわけ登校拒否生徒は集団状況において外傷的な体験を持っている場合が多く、合宿参加への抵抗はかなり強いようである。そのため、たとえば合宿の数日前に電話をして何か心配なことがないかどうか聞いてやったり、ファシリテーターが合宿当日の朝迎えに行ったりなど、その対応には十分に配慮しておく必要がある。

なお事前面接の結果、グループの展開を阻害する可能性の高い生徒や、個人治療が特に必要と考えられる生徒

には、参加を断ることにしている。

3. グループの構成とファシリテーターの役割

グループの構成は、原則として4、5名のメンバーを単位に、中学生と高校生、および男女で分けたグループにすることになっているが、参加者の人数状況によって一部が混合になる場合やごく少人数のグループがつけられる場合がある。

ファシリテーターは、各グループに所属してメンバーと受容的、支持的に直接深くかかわるファシリテーターと、そのグループから離れて間接的にかかわるファシリテーターの2つに分かれている。前者は、心理臨床の初心者である大学生および大学院生であり、後者は臨床心理士の有資格者である。後者は「アダルトグループ」と呼ばれるひとつのグループを構成し、その役割は運営事務・カウンセラー・スーパーバイザー・ファシリテーターという4つの機能を持っている。アダルトグループのファシリテーターは、特定のメンバーにかかわることよりも、比較的外側から観察することによってメンバーおよびグループの動きを敏感に捉えて、必要に応じた介入を行なわなければならない。

## 不登校生徒の合宿体験

合宿の集団全体に高い凝集性ができてくることは、メンバー個人の体験やグループの展開にとって重要な要因であると考えられ、そのためにまずはファシリテーター集団の凝集性が高いことが必要である。そのイメージとしては「ファシリテーター集団がまず“渦”をつくっておき、そこにメンバーを入れて、巻き込んでいく」というものである。ファシリテーターの事前学習会はそのような意義も持っている。

合宿中もファシリテーターは、メンバーの就寝後に毎晩ミーティングを行ない、その日のメンバーの行動の様子と心理状況を報告し合って、翌日のかかわりについて検討することになっている。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 合宿の参加者について

##### (1) メンバーの内訳とグループ編成

ファシリテーターの内訳を表1に、メンバーの内訳を表2に示した。メンバーは、中学生の男子が2名、女子が4名、高校生の男子が2名、女子が2名、計10名であった。なお合宿の申込み期間と実施が3月ということから、中学3年生や高校3年生は受験や進学で慌ただしい時期なので参加がなかったと思われる。

いったんは参加の意志をみせたが最終的には参加できなかった生徒には次のような者がいた。電話では自分から参加したいとしきりにいうけれども事前面接にさえ来れない生徒が1名、親に半ば強制的に連れてこられ事前面接を受けたがすぐに取り止めた生徒が2名、合宿前日に参加を取り止めた生徒が1名、当日欠席した生徒が1名いた。しかし、合宿前日に参加を止めるといいたしたが、しばらく話を聞いてやり、ファシリテーターが迎え

表1 ファシリテーターの内訳

	大学生		大学院生 研究生	教 官	その他	計
	1年	2年				
男	1	4		1		6
女	6	1			1	8
計	7	5		1	1	14

表2 メンバーの内訳

	中 学			高 校			計
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
男	1	1		1	1		4
女	1	3		2			6
計	2	4		3	1		10

表3 メンバーとファシリテーターの愛称

	メンバー	ファシリテーター
高校女子 グループ  (5名)	おおば よしこ  (2名)	クッシー ユキ まーや (3名)
中学女子 グループ  (8名)	ノンノン さちよ あきこ まり (4名)	せいこ ラッコ リンリン さとし (4名)
中高男子 グループ  (7名)	ひろ君 とし ゆう君 まっちょ (4名)	ラン あき しんさん (3名)
アダルト グループ  (4名)		ひげの先生 きりさん マーニー りょうさん (4名)

にいくことで参加できた生徒もいた。

グループの編成は表3に示したように、高校女子グループが5名、中学女子グループが8名、中高男子グループが7名、そしてアダルトグループが4名である。表3には、合宿の第1日目に決定した愛称をのせておいた。本来ならば中高別および男女別に4グループをつくるのが理想であるが、前日に中学男子1名、当日に高校女子1名の欠席者が出たのでこのような編成となった。

##### (2) メンバーの事前面接

事前面接の情報に基づいて、メンバーの参加経路と合宿への期待を表4にまとめて示した。参加経路については、新聞の案内をみた者が3名、名古屋大学教育学部心理教育相談室から3名、学校からの紹介が4名であった。

事前面接で得た情報をもとに、10名のメンバーについて、本人の成育歴、性格特徴、現病歴などについて以下に簡単に記述しておく。

①おおば：小学3年生のとき両親離婚。母が彼女を引き取り、小4のときに再婚。中学までは特に問題なくきた。まわりの人に気を使うところがあって、話を合わしたり、無理に元気にしている。大人しく、積極的ではない。弟(中2)も不登校。父親(現)は厳しい人で、一方的にいうので、本人はいい返せない。高校1年(90年)

表4 メンバーの参加経路と合宿への期待

愛 称	学年性別	参加経路	合 宿 へ の 期 待
1 あおば	高1 女	新 聞	今はとても落ち込んでいるので、良いきっかけになればと思って。他の登校拒否の子がどんなことを思っているのか知りたい。弟も登校拒否なので、参加してみたら、弟にも紹介しようと思う
2 よしこ	高1 女	名大相談室	うさぎやあひるが好き。合宿は楽しみ。
3 ノンノン	中1 女	名大相談室	不明
4 さちよ	中2 女	学校	参加者が少ないみたいだし、山の奥だし、まあいいかなあと想着。
5 あきこ	中2 女	学校	数日前から登校しているので、自分は登校拒否ではないので今回の合宿に参加しているのだろうか。
6 まり	中2 女	学校	不明
7 ひろ君	中1 男	名大相談室	家で退屈してゴロゴロしている。外の人にふれることがなかったから、恐いけどやってみたい。
8 とし	中2 男	学校	不明
9 ゆう君	高1 男	新 聞	特にない。(母親からの強いすすめがあった。)
10 まっちょ	高2 男	新 聞	特にない。(父親からの強いすすめがあった。)

の9月から不登校が始まるが、91年4月からは比較的元気に登校していた。しかし11月から体調が悪くなる。92年1月から吐き気を訴え、不登校。友人とは手紙を交換している。

②よしこ：幼稚園では集団に入れない。近所の子どもにも「恐い」と感じて遊べない。中学では、友達になじめなかったり、いじめられたりして、よく学校を休む。「女友達の言葉が気になって勉強ができない」「悪口をいわれている」という。気はやさしいが、ツンとしているようにみられやすい。自己主張ができない。父親は、頭ごなしに叱り、学歴至上主義で彼女の成績にやかましい。母親とはべったりである。高1の時、中学からの仲良しの友達とうまくいかなくなり、5月から完全に不登校となった。

③ノンノン：成績もよく、一貫して良い子的態度を両親にとってきた。妹(小5)との関係は競争的で、同胞葛藤が強い。母親は、なかなか彼女と気持ちがぴったりこないし、甘えてきても気持ちが悪いといって受け止めていない。小6の終わり頃から時々休むようになり、中1の2学期になって休みが増える。登校しても教室に入らず、保健室に半日いる。

④さちよ：6人同胞の末っ子。家のなかでは大人の会

話がされていて、彼女は赤ちゃん言葉を使わない子だった。小学校では、クラスから離れているような存在だった。気が小さく、自己主張することが少なく、いじめられることが多かった。現在、アニメや造形が好きな友達8人いて、遊びに行き合っている。中1は、約20日間の休み。中2の2学期から頭が痛いとよくいっていた。夏に湿疹がひどかった。9月は10日間休んで、11月の文化祭の後から休み始める。2月から不登校生徒の塾に通っている。

⑤あきこ：幼少期からひっこみ思案で大人しい子だった。自分の意見をはっきり言えない。先生の手伝いをすすんでやるので、先生のうけはよい。中1の頃から同級生女子に悪質ないじめを受けるが、ひとりで耐えていた。中1の3学期から中2にかけて、友達関係のことで時々休んでいた。中2の3学期に1ヶ月半の不登校があったので、その時に始めていじめの実態を親に話し、親は子どもの心が追い詰められ傷ついていたことを知った。合宿の事前面接の頃には登校を始めるようになった。

⑥まり：小さい頃から、明るく活発で友人は多い。幼稚園、小学校は皆勤。中学では、剣道部。リーダーシップもある。しかし幼い頃、親が人と話していると、遊びに没頭せずに聞耳をたてるなど、人のことをよく気にす

るところがあった。不登校の前頃から友人といると気を使うといった。父は、わがままで子どもみたいなところがある。母は、すべてのことをパッパと決めてしまうところがある。中2の2学期頃、友人が皆に呼び掛けて、彼女を仲間はずれにして、いじめた。その頃めずらしく、毎日お祈りをしていた。1月は7日間、2月は10日間の保健室登校である。周囲の人もまさかこの子が不登校になるとはと驚いている。不登校に思えないほど、すごく明るい。

⑦ひろ君：小さいときから無器用で、成績は最下位であった。そのためか、クラスでは浮いた存在になっていた。嫌だといえずにニコニコしているところがある。母は、本人に危険なことをさせないようによく手を出していた。中1の6月から不登校。

⑧とし：中2から不登校。体格はよいが、言動は女性っぽい感じである。母と密着した関係である。

⑨ゆう君：幼児期には人みしりが激しかった。幼稚園をかわった頃に眼瞼チックがあり、また小学高学年の時は潔癖症で手を何度も洗うことがあった。小さい頃から大人しい、ひっこみ思案。「うそは悪い」といい、潔癖。友達から嫌なことをされると根に持つ。自分がこう思ったら動かない。中1の頃まではずっと母親にべったりだった。中2頃から両親に反抗するようになってきた。高校1年のとき部活を休むので先生が怒ったところ、それ以来不登校となる。

⑩まっちょ：姉が男勝りで、姉が全部やってあげ、代弁していた。自主性のない子だった。家族で出かけた時、彼はひとりで別行動をとっていた。友達がいない。大人しく、意志がない。反抗はしないが、従わないで黙っている。高2の6月、登校をしぶるので送っていくが、学校を抜け出して色々なところへひとりで行ってた。9月から休学し留年となる。翌年度も完全に不登校。

## 2. 合宿の感想文

メンバーが合宿の最終日に書いた感想文をもとにして、合宿体験の効果について検討することにしたい。以下に、メンバー10名の感想文からの抜粋をあげた。

①あおば「随分と濃縮された4日間だったと思います。こんなにいい思いをさせてもらえるとは想像以上です。スタッフには、何をしゃべっても受けて答えてもらえました。昔、義父にひどい目にあわされて恐かったせいで男の人と話すのは避けようかと思ったけど、世の中そういう人ばかりということもないんだな、と頭だけじゃなくて分かった。ニックネームを作ると、自分を忘れるからガードもとけやすくなって良かった。今は帰りたくないと思っています。これで終わりなんです。またこう

いう合宿があって、登校もしていなかったら来たいと思う」

②よしこ「体調をこわして、最初はとても不安でした。しかし家から持ってきたたくさんの薬を一つも飲まずに、スポーツや夜更かしなどを楽しくできました。何が得られたかと聞かれてもはっきりとは答えられませんが、ものすごい小さなことがたくさん集まって、とても大切な何かになった気がします」

③ノンノン「父母のいる家が嫌いで、この合宿に参加して、もっともっともっと、と一っつも帰りたくなくなった。私とまりちゃんの話のせいこが真剣に聞いてくれて泣いてくれたのがうれしかった。学校へ行ってない人と話してみたいと思っていて、自分にとってプラスになることが多かった。父母や学校の友達にもいえないことをいえる友達ができて良かった。ほんの少し、私の心の千万分の1ぐらい学校へ行ってみようかなって思えた。来年もまた参加したいな」

④さちよ「皆ひとりひとりが共通な悩みを持つことによって、感じたままをすぐ口に出せるのが、この合宿の魅力だと思います。同じグループの人と、なぜここにいるのか、なぜ私達が学校を休まなければならないのかなど、有意義に話し合うことができて、今私達が生きる目的というのが少しは分かったような気がします」

⑤あきこ「今はもう学校には行っているけど、同じ気持を持つ仲間がいて、話すとき気が分かったりして良かった。体育館でもたくさん動いていい汗をかいて最高だった。スタッフのお姉さん、お兄さん達と夜あまりしゃべれなくて残念だった。もっといろいろ話したかった。1日目は心配の気持があったけど、『これからよろしくね』という言葉と言っただけで、後は気軽に話せるから不思議だなあと思った」

⑥まり「何で行かなきゃいけないの、知らない人と4日間も過ごすことができるかなと不安があった。せいこと話しているうちに不安もなくなっていきました。学校の友達や家族に話せないことが、同じ気持の持ち主に話すことで、心の中の悩みがひとつひとつ抜けていくような気がしました」

⑦ひろ君「僕がこの合宿に行こうと思ったのは、中学で学校をたくさん休んで全然いい事がなかったの、その分楽しもうと思いました。また学校を休んでいる人がどんな生活をしているか知りたかったからです。一番楽しかったのは、バスケットで皆と勝負することでした。またバトミントンでりょうさんと組んだとき『これは勝てるぞ』と思いました」

⑧とし「つき指をしたこと、お腹が痛くなったことなど色々あったけど、皆が心配してくれた。しんさんに

『おじさん』とかひどいことを言って本当に悪いことしたと思った。それなのに怒りもせず、『これから気をつければいいから』といって許してくれた。今まで人が嫌がることはいわないように気をつけてきたつもりだけど、今回のことで人の気持を考えるとということが大事だということがよく分かった。怒らないで注意してくれるなんて、しんさんを僕は尊敬したいと思う」

⑨ゆう君「始めはこの合宿はあまり乗り気がしませんでした。でも、僕と同じ境遇の人たちばかりなので、少しは気持が落ち着きました。ランは、僕とよく話をして下さって、うれしかったです。僕は、女の人とまともに話をしたことがなかったのでとてもうれしかったです。3日目に僕がいじめてひとりで無茶な山歩きをしても、ついて来てくれたし、りょうさんも呼んできてくれて、僕に気を使っていたら非常にうれしかったです。本当に心から、あの時は悪いことしたと謝りたいくらいです。ユキは自分自身も弱いということを僕に話してくださいました。心の底に思いやりがあふれていると感じました。今後も姉として、お話をしたい。行事をやるときは参加させて欲しい」

⑩まっちょ「学校で行った合宿では、ほとんど先生が指導してくれて自分達でやっているという実感がわかなかったけれども、この合宿では自分自身で考えて行動しなければならないので頭を使わなければならないし、自分自身のことに責任を持たなければならないので大変だった。自分自身はこの合宿では、食欲がなかったり朝起きるのが遅くなったりしてうまくいったとはあまり思わないけれども、精神面ではひとまわりもふたまわりも大きくなったような気がする。学校を続けるかどうか、またやめるなら、やめた後でどうするかを決め社会生活をしていかなければならないと思う。僕は今特にやりたいことや就きたい職業がないので、それをこれから見つけていき、それに向かって進路を決めていかなければならない」

### 3. グループの展開

#### (1) 高校女子グループ

このグループは、メンバーがあおばとよしこの2名、ファシリテーターがクッシー（男性）、ユキ（女性）、まーや（女性）の3名で、計5名という他に比べて小さなグループとなった。よしこは、長めの髪をヘアバンドなどで整え、パステル調の柔らかな印象の服装でまとめたほんわかとした女の子らしさをいつもかもしだしている子である。あおばは、髪はボーイッシュな感じで、どこかひょうひょうとしたところを感じさせる子である。

第1日目。バスに乗り込む際、自然によしこがあおば

は、隣どうしの席に座った。車中では友達の話や漫画の話でけっこう盛り上がり話しており、現地での昼食時にも一緒に食べている。しかしファシリテーターがふたりの話に入っていくと、今までのふたりの会話の流れが急に途絶えてふたりの間に言葉が交わされなくなり、ただファシリテーターの持ち出す話題に対して受動的に反応するだけになる。特によしこはうつむいてしまって話せない感じになる。彼女らからファシリテーターへの積極的なかわりは見られず、ファシリテーターに対して彼女らは自分たちを閉じてしまう傾向が見られた。

午後のゲームで、はじめてグループの5人が一堂に会したが、ゲームの性格がとくにグループ単位での結集を必要とするものではなかったため、散発的に軽い会話が交わされる程度で、グループの中で話が展開することなく過ぎていった。ゲームでは、あおばはけっこう楽しそうに参加しており、愛称を発表する時もひょうひょうとした感じで前に立ったのだが、よしこはつらそうな表情で終始うつむいており、自分の発表ではいかにも居づらそうにうつむいたまま前に立ち、それが終わると逃げるように席に戻っていた。

その後の自由時間、ロッジでふたりは絵を描いていた。よしこが「私は小さくなりたい」というと、あおばは「それが、今の気持なんだね」と受容するような感じでいていた。ユキがふたりに話しかけ、「何かつらいことは？」と尋ねると、よしこは「前は苦しいことがあったけど、今はあっけらかんとしている」といい、あおばは「今苦しい渦中にある」という。

夕食では、彼女らは黙々と食事を済ませる。食後、ロッジでキャンプファイヤーの出し物を考えるときも、彼女らは傍観的に参加するだけであって、結局ファシリテーターが主導するかたちになる。出し物の歌が決まると、ふたりとも練習をしっかりとやって、そして本番でもしっかり歌っていた。ファシリテーターから要求することには、嫌な顔をせずそのまま従うふたりである。キャンプファイヤーのジェスチャーゲームでは、ふたりとも楽しげに参加していた。

第2日目。あおばは、朝から腹痛を訴え、午前中ロッジで休んでいることになる。中学生女子の3人が自分たちの漫画やカセットテープ、お菓子などを持って見舞いに訪れ、あおばはとでもうれしそうな表情を見せる。アダルトグループのきりさんがロッジに残り、昼過ぎまであおばと過ごすことになる。

よしこは皆と体育館でバレーボールをするが、その取り組み方は真剣な感じで、失敗をすると露骨に顔を歪めて「あー、しまった」という表情をする。自分の失敗を人に見られることが、彼女にとって大きな苦痛のようで

## 不登校生徒の合宿体験

ある。バレーボールのチームの人と会話を交わすことも少なく、チームの中でも身の置場がない様子である。グループで集まったの昼食では、疲れた顔でうつむいていた。

午後は工作で、よしこは最初は気乗りしない様子だったが、始めると頑張っている。しばらくしてあおばが、少しふっきれたような明るい表情でやって来た。しかしこれ以後、よしことあおばとの会話は昨日よりも少なくなった。あおばの変化によしこが距離を感じたのだろうか。工作ではふたりとも真面目に黙々とやるが、やり方が分からないときでも、伏し目がちに周りをキョロキョロ見るだけで、自分から尋ねることはせず、ファシリテーターが「どうかしたの?」と配慮してあげるといふかたちである。そしてファシリテーターのアドバイスは素直に聞き入れる。次の野外炊飯では、手間の少ない焼きそば担当となり、調理に追われる他のグループを尻目にグループでくつろいでいる。しかしくつろぐといっても会話が展開することはなく、そこはかたない気詰まり感がいつも漂っていた。クッシーがこれまでのところの合宿の印象を尋ねると、あおばは明るい素直な表情で「うん、よかった」と答えるが、よしこはしばらく困って、笑ってやり過ごす。調理でも、あおばは自分からすすんでやるなど昨日とは違って積極性がみられたが、よしこは頼まれたことだけをやっていった。

炊飯後は自由時間となり、ずっとトランプをやる。皆淡々とゲームを進め、話題もゲームに限られているので、ファシリテーターには「こんな遊びでいいのかな」という軽い焦燥感が感じられてきたが、実は同じような物足りなさを彼女らも抱いていたかもしれない。

第2日目の午後からはようやく本格的なグループ単位の活動となり、いやでもグループという枠を意識して、お互いが向き合わなければならなくなった。しかしそのような状況の下で、このグループではお互いが対話へ向かおうとするのではなく、その場面での「なすべきこと」の役割遂行に撤することによって場を切り抜けていくというあり方を自然と取ってしまった。メンバーだけでなく、ユキを除くファシリテーターふたりも自分を出さないでおいて表面的な和やかさを維持することに力を注いでいたといえよう。

夜のファシリテーター・ミーティングが始まっても、ユキは彼女らと部屋に居て、いろいろと心の内を深く語り合っていた。遅れてやって来たユキは、彼女らとの関わりの様子を公開することを拒否した。ユキは、あおばが「わたしたちがモルモットになるのはいや」といっていたといい、ユキ自身もそれに同感だということ。ここで露

呈したファシリテーターの関わり方をめぐって議論が起きて、ユキはファシリテーター集団から心理的に離れてしまい、メンバーと密着していくことになってしまった。

第3日目。昨日から高校男子のゆう君が彼女らふたりが寂しそうだから一緒に遊ぼうと誘っているということ、クッシーが彼女らに伝えると意外にもあっさりOKする。あおばは、そのような誘われる機会を待っていた感じの反応であった。

高校男子のまっちょが居なくなって皆が心配しているとき、思案に暮れるクッシーにあおばが「私も帰りたくなったりしましたよ」とさりげなくいう。人の思惑を気にし過ぎて身動きが取れなくなってしまう彼女が、人をますます不安にさせるようなことを軽く冗談でいうことができたことに、クッシーは彼女の変化を感じた。

ユキを除く4人で、体育館に向かいながら話をする。よっちゃんの趣味はライブで、時々コンサートに行くという。あおばは写真が趣味で、写真部に入っているという。合宿に参加した動機を聞くと、よしこは「何となく、少し休もうと思った」と軽く答えたのと対照的に、あおばは「同じような立場にいるいろいろな人にとって話を聞きたいと思った」という。クッシーが機をみて不登校の話を持ち出すと、よしこはあまり表情を変えず、「なぜか学校の成績がだんだん下がってきて、学校に行きたくなかった」といい、あおばは、「学校の先生は気持ちを分かってくれない」と語っていた。

体育館のバドミントンでは、あおばは楽しそうにやっていたが、よしこは失敗に顔をしかめている。この頃からよしことあおばは、別々の行動をとることが目立つようになり、あおばは皆の中へ入っていくとする積極的な動きが多くなった一方で、よしこは相変わらず自分の中に閉じこもりがちであった。そのような彼女と同じく全体からはずれ気味のユキが一緒に寄り添っているという状態であった。

午後は乗馬で、あおばは乗馬に挑戦し、すがすがしい感じで乗っていた。一方よしこは乗馬をやりたがらず、まーやと一緒に小屋の動物を長い間ながめていた。まーやが動物に触れたり餌をやったりすることを勧めても、彼女は「いい」といって見ているだけである。

夕食のバーベキューでは、あおばはいろんな人に声をかけ話をしていたが、よしこは周囲とあまり接触をもたずぼつんと食べていた。

いよいよ大屋敷での最終夜を迎える。将来の夢が話題になると、よしこは「大学へ行って心理学を勉強したい」と決意の感じられるはっきりした口調で話し、一方あおばは「自分がどういう方向へいったらいいか、まだ分からない」という。



夜も深まる中、ふたつのこたつでゲームが始まる。あおばは早めに床に就いたが、よしこは起きていて、ゲームをやっているこたつに自ら入ってきて、ファシリテーターにゲームを誘われても「いい」といって、ゲームを眺めている。夜が更けて起きている人が少なくなってきた、賑やかにゲームをしている横で何をするでもなく起きている。その姿は非常に印象に残るものであった。よしこはあるファシリテーターに「夜は強いから起きている。夜は何か起きる気がする」と語っている。彼女は何かを待っていたのではないだろうか、あるいは見ているだけではあるがその場に参加して楽しさを共有していたのではないだろうか。彼女は明け方近くまで起きていた後、そのままこたつで眠った。

第4日目。ふりかえりの会で、グループ内で色紙を直し書きする。他のグループでは少しふざけて書くような雰囲気もあったのだが、このグループでは長い時間をかけて真面目な内容のものを書いている。このようなグループの特徴を、あるファシリテーターは「お互いが支え合っている感じで、他の者がそこに入ると関係を壊してしまいそうで入りづらかった」と述べている。

あおばは「スタッフの男の人とちょっと話をしたかった」という。帰りのバスの中では、先のあおばの話を受けてクッシーがあおばの隣に座る。今まで彼女らとの間では表面的な会話しかできなかったクッシーであったが、この時ようやくあおばと深く話をすることになる。あおばは不登校のことについて語った後、これからのことについて「4月からは学校に行くつもりだけど、また行けなくなるんじゃないかと怖い」と不安を語る。あおばはクッシーについて「自分を出さない人」と評し、これまでグループの中で話しづらかったことが率直に語られる。それを機にクッシーが過去の自分のことを話すと、あおばは興味深そうに聴き、いろいろ尋ねてくる。合宿全般に対する印象については「この4日間はすごく良かった。スタッフはやさしくて、話を聴いてくれて、楽しかった。もっといたい気がするけれど、これは現実でなくて夢だから、これ以上長くいるともう現実に戻れなくなる気がする」と語る。そして心残りになっていることを尋ねると「アダルトグループの人たちとも話してみたかった」と残念そうな表情を見せる。

## (2) 中学女子グループ

このグループは、中学1年生のノンノン、中学2年生のさちよ、あきこ、まりのメンバー4名と、せいこ(女性)、ラッコ(女性)、リンリン(女性)、さとし(男性)のファシリテーター4名で、計8名である。

第1日目のバス中のメンバーの様子は次のようであった。ノンノンは、さとしが話しかけても黙って外を見て

いるだけで、打ちとけようとはしなかった。しかし唐突に、桜の木の下に死体があるという話をするので、さとしは驚かされた。その後は、次第にマンガなどの軽い会話が増えてきて、なじんできたようであった。さちよとあきこはリンリンを間において、ふたりとも交互にリンリンに向かって話をするだけで、3人の会話にはならなかった。まりは、せいこと一緒におしゃべりを楽しんでいた。

出会のゲームでは、ノンノンが全体の進行役をとって発言が多く、まりとさちよも積極的であるが、あきこは大人しかった。このあたりからメンバー同士の交流が少しずつみられるようになるが、まだファシリテーターが間を取りもって会話がすすむ感じであった。

夕食時まりが、自分が学校でいじめられた話をすると、それに対抗するかのようにノンノンもよく話をした。しかしお互いに自分の話題ばかりで相手の話をよく聞こうとはしないので、話がかみあわなかった。あきこは、その話を黙って聞いているだけであり、さちよは、別のテーブルのファシリテーターに囲まれた席についていた。

キャンプファイヤーでのメンバーの出しものは、一致団結していてグループとしてのまとまりが感じられた。その後ロッジでこたつを囲んで、グループの雰囲気がよくなってきて、メンバー4人が電話をかけに行くという行動がみられた。またロッジに入るときは、「ただいま」「お帰りなさい」と声をかけ合っていて家族的雰囲気がみられた。

ここまでのところで、この4人のメンバーについて、次のような印象が得られた。ノンノンは自分から積極的に話をするが、それは自分中心であって、お互いに会話をしている感じがしない。しかし、よく人の世話をする面もあって、「ここに座ったら」「寒かったらセーター貸してあげるよ」という。まりは甘えたような感じで積極的に話をする。集団内で発言が多く積極的に他者とかわろうとしているメンバーは、ノンノンとまりである。さちよは、メンバーよりもファシリテーターに関心を向け、自分からかかわってくるのであるが、「どうもすみません」ということが多く、過剰に気を使っている。あきこは、大人しくて、自分から発言することはあまりみられない。まりがあきこをリードして、ふたりは行動を共にすることが多く、またふたりの間には何か秘密ができた様子である。第1日目の前半は、ファシリテーターを介してメンバー同士が交流するという状態であったが、後半は、メンバー同士の直接的な会話や、伴に行動することがみられるようになって、グループ全体としての凝集力は高まっていった。グループ内のダイナミクスは、まりとあきこのペアが形成され、まりとノンノンは競争

的な関係である。ただし、まりとノンノンはそれぞれ自分のことを一方的に話しているだけであって、衝突することはない。

第2日目。昨夜は、学校の話や怖い話で盛り上がって楽しかったという。まりは「はじめて会った人たちなのに、あんなに盛り上がって、不思議。学校の友達より良い。もう私たちしゃべりつくした」といっていた。ノンノンは話を一方的にすすめていくことが少なくなり、あきこは昨日よりおどおどした感じがなくなってきた。午前中は体育館でバスケットをやるが、4人が団結して、メンバー同士が名前を呼んで声をかけあっていた。ノンノンは、さとしに身体接触してじゃれていた。昼食は、ファシリテーターも含めたグループ全員が輪になって食べ、なごやかな雰囲気があった。

午後の工作では、ノンノンはすすんでふとりに道具を準備してくれた。誤ってノンノンは指に怪我をして、せいこに手当てを求めてくるのだが、これまでにないような甘えをみせていた。

次の野外炊飯では、さちよ以外の3人は、おしゃべりに夢中で準備はあまりやらなかった。ノンノンが幼なじみの好きな人がいるという話をしたので、まりとあきこははやして、そして自分たちにも好きな人がいることをラッコにうちあげた。まりはさとしを、きよこは別のグループのファシリテーターのクッシーを好きだという。そして「ノンノンだけには知られたくない」といってふたりは結束した。まりは、さとしに積極的に近づこうとするノンノンを気に入らないようであった。さちよは、そのような話には特に関心がない様子で黙々と準備をやっていた。食事になると、グループが輪になって和やかな雰囲気、他のグループよりも出来が良いといって皆で喜んでいて。その後の自由時間は、皆でこたつに入ってトランプをやっていた。

第2日目になると、メンバー同士で会話がすすんでいくようになるとともに、人の話を聞く態度や相手の反応を待つ姿勢ができてきた。グループのダイナミクスでは、ノンノンが「まりちゃん、怖い」といっているように、ノンノンとまりは競争的關係にあり、まりはあきこと結束してノンノンに対抗しようとしていた。さちよは、3人の話題に関心を示さず、むしろファシリテーターとのかかわりが多かった。

第3日目の朝、メンバー4人が起きてきて、昨晚ファシリテーターのミーティングが終わるのを待っていて、いつの間にか眠ってしまったという。ノンノンがせいこの隣に来て話をして、他の3人はそれを黙って聞いていた。ノンノンは、学校で先生がどれだけつまらない人かということ色々な例をあげて面白おかしく話した。そ

してまりもその話に加わってきたが、他のメンバー2人は朝食に行ってしまった。それから1時間、ノンノンとまりは、いじめ、友人関係、担任の先生、家族、小さい頃のことなどを話した。彼女らは小さい頃甘えられなかったことを語った。ノンノンは感情的になって話すが、まりは自分なりに整理して話をしていく。はじめはお互いが、自分のことを聞いてもらいたいのか「私なんて…」といういい方であったが、次第に「分かる、分かる」といい合って、ふたりの感情が交流していくようになった。ノンノンが、以前母親にひどいことをいわれたと泣きだすと、それにつられるかのように、まりとせいこも涙を流した。まりは、「こんなに次々と話が出てくるのに驚いた。私は今までいわずにためこんでいたんだね」といっていた。

午後からは乗馬をやることになって、乗馬場へ歩いて向かう途中で、ノンノンとまりは、せいこをラッコをブランコに乗せて押してくれた。彼女らにとってファシリテーターは、上下関係や一方的な依存関係ではなく、仲間あるいは同志という関係のようであった。乗馬場には、馬をはじめ、犬、うさぎ、鳥がいて、ノンノンとまりは、犬とじゃれあって楽しそうであった。夕食前に展望台へ行った時、まりは、さとしに話しかけたいのだが、恥ずかしくて声がかかれなくてイライラした様子であった。彼女はせいこやリンリンに、間をとりもってくれと何度も要求していたが、自分でいうようにと励まされると、少しふくれてしまった。一方あきこは自分から好意を抱いているクッシーに話しかけており、随分積極的になってきた。

夕食のバーベキューの時にノンノンは、色々手伝いをしていて。ひととおり食べ終わったところで、まりとあきこは、他のグループのファシリテーターのランを連れ出して外に出た。まりはランに、「4月から学校に行くつもり。終業式に始めて友達が側へ寄ってきてくれてすごうれしかった。それで、もう学校へ行ける。合宿へ来てよかった」といった。また「さとしとクッシーに、自分たちの登校拒否の原因を話してほしい」といった。しかしその後、ランとさとしが仲良く話しているのを、まりが見てやきもちを妬いて、「ランちゃんなんて信用できない。陰で悪く言われている。秘密をばらされている」といって怒り出し、その愚痴をせいこにもってきた。

まりは機嫌を悪くしたままなかなか治まらないので、せいこが「今思っていることをランちゃんに直接自分から伝えてみたら」とすすめると、しぶってはいたが、「ランちゃんに聞いてみる」と決心して自分からぶつかっていったと和解することができた。

このようにして第3日目は、個人の心理的課題が顕に

なってきた。早朝から、ノンノンとまりが涙を流して、これまで抑えてきた辛い体験を語り始めた。彼女らは、うまく甘えられず強がりや皮肉をいってしまう自分から、素直に甘えることのできる新しい自分を形成しようとしているかのようであった。あきこは、おとなしく自己主張のできない子であったが、好きな人であるクッシーに対して積極的に話しかけるようになった。あきこは、学校では友達というなりになっていて、いやとはいえずに、ひどいいじめを受けていたにもかかわらず、自己主張できるようになってきた。

第4日目最終日の午前中は、お互いに色紙に書き合うことと、感想文を書く課題に取り組んだ。メンバーは皆、積極的に色紙交換をしていた。メンバーの話がはずみ、お互いに話をしたり聞いたりして交流ができていた。さちよが学校や進学のことと新たな決意を語っている姿には、合宿でエネルギーを得たように感じられた。ノンノンは、「今とは別の学校なら行けるけど、今の学校へは行けない。でも学校を替わってしまうと自分は負けたことになってしまう」といった。ノンノンとさちよは、「もっと長ければいいのに」「ずっとここに居たい」というていた。

以上、中学女子グループの展開をみてきた。そこで、グループの展開とメンバーの体験について考察することにした。

先に記述したように、最終日の感想文の中で彼女らは、合宿が自分たちにとって非常に有意義な体験であったこと、特に同じ悩みを持った者同士が深く語り合えたことがよかったと述べている。彼女らに共通していえることは、これまで独自の心理的世界を他者と理解・共感できなかったのであるが、この合宿で他者とりわけ同年齢の仲間とそれを共有できたことに驚きと喜びを感じているということである。個々のメンバーが抱えている心理的課題は異なっているのであるが、その違いを乗り越えて、互いに理解し合いたいという強い要求が彼女らにはみられる。彼女らは、これまで親や教師という大人から取り入れた様々な価値観、特に達成志向によってひとまずは「仮の自己確立」を試みようとしてきたのであるが、実は自己確立に向かうための基礎となる「ヨコの広がり」「他者との共感」は脆弱であった。彼女らはいわゆる“よい子”として、タテ関係においてのみ自己価値が認められてきた生活背景を持っており、このような自己価値は一面的で狭い枠組みにおいてのみ意味をもっていた。しかし彼女らを取り巻く現実世界は拡がる一方であって、このような多面的かつ広い枠組みのなかでは自己価値を認めることは困難になってくる。そこで「真の自己確立」へと上昇していくための基盤となる「他者との共感」が

必要になってくるのである。彼女らは互いに、自分の話をしてそれを聞いてもらい受け入れてもらったという体験、自分の悩みと似た気持を他の人から聞いて自分はひとりではないという体験をしたのである。彼女らは本合宿において、自己の心理的世界を仲間と共有する体験、すなわちヨコ関係のなかで自己価値を見出す体験を得ることができたといえる。

このような心理的体験を合宿で得た彼女らは、それを日常生活に持ち帰っていった。合宿後に行なった保護者へのアンケートには、合宿前とは違った彼女らの様子が書かれてあった。まりの母親は「あんなに元気な姿を見るのは久しぶりででした。『皆も色々な悩みがあるんだよ。私も頑張らなくては』と書いていました」と述べ、あきこの母親は「以前よりも学校の友人に対して話し方がしっかりしてきました」と述べ、さちよの母親は「合宿後の数日間は自分の方から次々と話しかけてきて、今までにないその積極的な話しぶりに、やっと子どもらしさを感じられました」と述べている。

このグループのエネルギーは、日を追うごとに高まり、われわれファシリテーターが圧倒されるほどまでになっていった。彼女らメンバーのそれぞれが抱えている心理的問題の性質は異なる部分はあるだろうが、個々が互いにエネルギーを出し合って、あたかも“いくつかの小さな渦が集まって、大きな渦を巻きはじめた”かのような印象がもたれた。表面的には、グループは全体としてまとまって行動し良い雰囲気をもっているが、グループのメンバー間には「闘争」や「ペアリング」がみられる。これらは従来、グループ発達の阻害要因としてあげられ、グループの展開を阻害し凝集性を弱めると言われているのだが（Bion, W. R., 1952）、むしろ本グループのこの段階では、グループが次の局面に展開するための乗り越えるべき建設的方向への課題として捉えておいた方がよいように思われる。本合宿においては、メンバーはグループに所属するファシリテーターから支えられ、さらにそれらをアダルトグループが支えるという構造すなわち「三重構造」によって、個々のメンバーは守られており、容易には崩れない安定した基盤を保証している。そのような安定感のあるグループ構造、それを「抱えられた構造」と呼ぶことにするが、その中で個々のメンバーは自己の心理的課題を投入していくことが可能になるのである。そしてファシリテーターのかかわりを触媒あるいは媒介として、個々のメンバーの心理的課題が仲間関係の中で試され、「ヨコ体験」としての意味を獲得していくのである。

#### 4. 個人の合宿体験

##### (1) あおば

ファシリテーターのきりさんは、ほどよい年頃の唯一の女性ということで、“お母さん役割”を担うことが期待されていた。きりさんとあおばとの関わりは2日目の朝に始まった。あおばは、腹痛のため午前中部屋にいることになった。きりさんが「私がいた方がよければいるけど、どう？」と尋ねると「お世話かけますけど、お願いします」と丁寧な大人っぽい口ぶりで答えた。きりさんが少し眠るようにすすめると、彼女はしばらくうとうととしていた。

ここまでの彼女の様子を振り返ると、第1日目は集団の中では控えめで、ゲームへの参加も受動的であった。同じグループのよしことふたりで少ない会話をしているだけで、そこにファシリテーターが入ると話が途切れてしまっていた。2日目の朝から腹痛を訴えるというのは、人知れず神経を使っていたのかもしれない。

しばらくして、あおばは起き出してきて、「ちょっと話をしてもいいですか」といい、学校のこと、家族のこと、友達のことなどをゆっくりした口調で語った。

以前は他人に気を使う性格だったが、この頃は他人がどう感じているかが少し分かるようになって、気が楽になった。また以前は無口だったが、今は相手に自分の考えを伝えることができるようになってきた。学校では、留年しているのでクラスになじめない。同年齢の子がいいと思うが、それでも本当の悩みを話しても分かってくれないだろうと思う。学校でも気を使うが、家でもびくびくしている。小学3年生の時に両親が離婚して、翌年母親が再婚した。もう9年になるので養父を父親と思いたいが、うまくいかない。養父には小さい頃叩かれたので怖い。今も返事もしてくれない。実の父に会いたい。父なら私の気持を分かってもらえるかもしれないと思う。

あおばは話の途中で、「こうやって話をしていると心が落ち着きますねえ」といい、少し元気になってきて、午後からの行事には参加した。他のファシリテーターの目にも、彼女が何かふっきれたような表情をしていることが分かった。

第3日目。この春から高校の先生になるというファシリテーターに向かって「隣で歩いている人が先生だなんて思えない」と驚いて、学校の先生は気持を分かってくれないということを語った。午後きりさんと歩きながら、彼女は「今度学校に行ったら・・・」という言葉が出るが、それは登校する元気が出てきたのかそれとも無理をしているのか。彼女は写真部に入っていて、作品を発表して賞をもらったことがあるという。「牧場の赤ちゃんうさぎを写して、それを先生に見せに学校へ行きたい

けど、カメラを忘れてしまった」という。カメラを借りることを促したが、強い調子で辞退した。夜のバーベキューでは、中学生男子のとしちゃんと、人のことを気にしてしまう話など真剣にしていた。この日は最後の夜だったが、早めに寝てしまっていた。

最終日。合宿中、彼女はグループの3人でひとかたまりになって、他との交流がほとんどなかった。きりさんが、もっといろいろな人と、特に男性ファシリテーターと話がしたかったのではないかと尋ねると、彼女はうなずくので、彼女と同じグループのクッシーにそのことを伝えた。帰りのバスでは、クッシーに「4月から登校するつもりだけど、また行けなくなるんじゃないかと怖い」「合宿は楽しかったけど、これは現実でなくて夢。これ以上長いと、もう現実に戻れなくなる気がする」と語った。

彼女の不登校は、「優等生の息切れ型」と呼ばれるタイプである。学校ではずっと上位の成績を維持しており、また合宿中の様子をもみても素直で実に良い子である。両親の離婚、養父との摩擦といったタテ関係の力に萎縮して、ヨコ関係の体験をできないままに青年期を迎えてしまっている。そして本格的にヨコ関係に入っていくことが要求される年齢に至って挫折し、それまで拠り所としていた生き方には虚構性がみえてしまうため、タテ関係の中にもいられず、かといってヨコの学校社会にも踏み出すことができず、身動きがとれなくなって引き籠もらざるを得ない状態にいる。

彼女は同じような立場にいるいろんな人に来て話をしたいと思って合宿に参加したと述べている。友達、学校といったヨコ関係の中でうまくやっいけないこと、人に気を使ってしまってうまく話せないことを自分の問題として、すでに彼女自身はとらえている。

合宿中は自分から積極的に話しかけていくことは少なかったが、話しかけられればそのつど真剣に自分を振り返るとともにそれを相手に伝えるという体験ができたようである。彼女は感想文の中で感謝の言葉を重ねている。しかし、それはファシリテーターが徹底的に受容してくれたおかげであって、「これは現実ではなくて夢」といって、日常生活に戻れば合宿中のようにはいかないことを予期して恐れている。

「ニックネームをつけるとガードもときやすく、カボチャやトマトになれてよかったがピーマンにはなれなかった」というのが彼女の合宿に対する総括であり、その一言に彼女が成し遂げたこととできなかったことの両方が象徴されている。ピーマンは自分でもまだつかめない本当の自分の姿であり、カボチャやトマトは普段他人にみせている姿とは少し異なるガードのとれた自分の姿であ

ろう。ピーマンになれなかった理由のひとつには、高校女子グループの動きが十分でなかったことがあげられる。メンバーふたりという小さいグループであったことや、よっちゃんも自分を出せないタイプであったこともある。もうひとつの理由は、彼女はまだ歩み始めたばかりで、ヨコ関係のような竜巻に巻き込まれては一晩で立ち上がれなくなる運命にあることを自分自身十分に感じていたことによる。最後の夜に夜更かし組に加わらずに早々と寝てしまったのは、もう一枚ガードを取って未知の世界に踏み出さざるを得なくなる状況への不安から逃げだしたのであり、「これ以上長いともう現実に戻れなくなる気がする」という彼女のバランス感覚の現れである。彼女にとっての過去の自分は、虚構性がみえてしまったとはいえなおかつ拠り所であることには違いなく、「自分づくり」(竹内, 1987)がある段階までいかないことには自分を崩してしまうわけにはいかなかったのであろう。彼女にとっては「1対1のヨコ体験」がひとまずの課題であり、「グループにおけるヨコ体験」はまだ大きすぎる課題であった。彼女がヨコ関係に入っていけないのは、実はタテ関係がしっかり形成されていないからであり、この合宿のもたらすしっかりしたタテ関係に支えられた「原家族的な雰囲気の中で、あるがままに受け入れられた体験の中で、彼女は過去の自分の殻を破って、そして「1対1のヨコ体験」においてある程度の成果を得たのであろう。

4月から登校できそうなことをいっていたが、現在彼女は登校していない。「自分崩し、自分さがし、自分づくり」という大きな作業に向けての逡巡と模索のための過程の中で、彼女にとっての今回の体験は、いまだひとつの成果に過ぎないが大きなきっかけとなるに違いない。

## (2) ゆう君

合宿後に行なった保護者のアンケートで、ゆう君の母親は、人と付き合うのが好きでなかった彼がファシリテーターと話したがつている様子や、4月から大検の予備校に通い出したことを伝えていた。わずか3泊4日の合宿ではあるが、顕著な変化がみられた事例である。合宿を通して、ゆう君の心の中で、いったいどのような心理的体験が起こって、このような変化が生じたのだろうか。それを知るためにはまず、ゆう君の事前面接からみていくことにする。

高校1年生のゆう君は、母親が新聞に載せられた合宿案内を見て申込んできた。事前面接には、母親と一緒にやってきた。彼は、気弱で大人しそうな子にみえた。母親の話では、先生から怒られて以来ずっと学校を休んでいるという。家族は、両親、姉、ゆう君の4人家族である。母親との関係は中学生になっても身体接触があった

りしてかなり密着的であったが、2年ほど前から徐々に母親にも反抗するようになってきた。最近では、厳格な父親に対しても反抗が出てくるが、反抗は中途半端で、文句をいうとすぐ逃げてしまう。幼児期は、人見知りが強い子で、また眼瞼チックが一時期みられた。小学高学年の間、手を何度も洗うような潔癖なところがあった。中学2年生の時、数日間不登校があったが、彼自身がカウンセリングを受け、すぐに登校できた。性格は、ひっこみ思案で、潔癖、正義感のある子である。人から嫌なことをされると根に持ったり、自分がこうと思ったら動かない、強情なところがある。

母親面接と並行して別の面接者がゆう君と会った。合宿への期待は「特にない」といい、合宿に対する不安は「他の人と一つの部屋で寝るのがいや」という。自分から「合宿はどういう目的なんですか」と尋ねてくる。そこで、仲間づくりが目的で、強制的にやらせるようなことはしない旨を伝えると「強制的にさせられるのは大嫌いです」と語気を強める。また「僕は、集団ってあまり好きじゃないんです。僕はとろいんです。へまをやって、他の人にゴチャゴチャいわれるのがすごく嫌なんです」という。別室から面接室に戻ると母親を独特の表情でじっと見つめる。合宿参加の確認をとろうとすると、なげやりな感じで「それじゃあ行くことにします」といって、母親をまたじっと見つめる。無理に行かされることになってしまったという恨みのこもったまざしである一方、「恋人をみつめるような”密着した感情があるような印象が持たれた。

この事前面接から、ゆう君の問題として、母親との密着の関係、厳格な父親への心理的反抗ということが推測された。ゆう君は母親への依存と父親への反抗という「タテ関係」に縛られており、集団が嫌いといっているように「ヨコ体験」の狭さがみられることが分かった。

合宿の第1日目、集合時間よりも30分前にひとりで来た。表情は堅い感じで、緊張している様子であった。バスにはひとりですわり、ウォークマンで音楽を聴いていたが、話しかけると笑顔をみせ少し話をしてくれた。昼食時、彼と同じグループになっているファシリテーターのランが話しかけても言葉少なく、あまり反応がなかった。出会いのゲームの愛称当てゲームで彼は、ランの意見を参考にして「やかんから出る湯」と「鶴」を描いて、「ゆう君」という愛称であることを皆に当てさせた。出会いのゲームが終わってから皆でサッカーをやったが、このときから表情が生き生きとしてきて、ファシリテーターが話しかけるとよく話をするようになった。男子グループのメンバー4人が一緒に歩くことがみられ、グループとしての意識も少し出てきた。彼は、特に中学生のひ

ろ君に近づいており、年下の子に対してめんどろみが多い。夕食後、彼はカメラで皆を写していた。

最初は緊張して反応が少なかったが、体を動かした頃から表情が明るくなってきて、グループ内ではひろ君とペアになった。ファシリテーターの印象を総合すると、やさしい、人に気を使うことが多い、ということであった。

第2日目は、朝食を食べ終わると、食堂から出てひろ君とふたりだけでいた。体育館に向かう途中、ランに「自分も大学に入って、このような合宿を企画したい。心理学をやりたい。スタッフの仲間に入りたい」といい、また彼の高校の話になって「学校の部活も、学校自体も変だ。縛られることが嫌い」といった。この頃からランに、彼自身のことをよく話すようになっていった。体育館でのバレーボールやバスケットで、彼は体がよく動いて、上手であった。昼食の弁当はひとりで食べており、皆の輪からは外れていた。午後からの竹細工づくりで彼は、皆から離れた席に腰かけて黙々と作製していた。その後の野外炊飯では、火を起すことに熱心であったが、そこでもひとりでやっていた。宿舎への帰り路でしんさんとクッシーが、彼にエッチな話をしたら、非常に楽しそうな表情をして喜んでいて。そしてひろ君に「大人の男だったら当たり前のこと。子どもは知らなくていい」といって、ひろ君を子ども扱いしていた。夜、ファシリテーターのミーティング中に、彼ととしがお菓子をもらいにきた。彼は、ウイスキーの瓶を手にとって「お酒を飲んでもいいですか」と笑いながら尋ねた。ファシリテーターのひとりが「いいよ」というとうれしそうだったが、りょうさんが禁止すると、半分笑いながら驚いたような顔をして「意外と冷たいんですね」と繰り返しいっていた。

彼は、中学生のひろ君と行動を伴にすることが多く、またファシリテーターに近づこうという様子が見られた。中高生グループのメンバーは彼の他に、年下の中学生ふたりと無口な高校生のまっちょであるので、彼の会話の相手が自然とファシリテーターになってしまうということもあるが、むしろ彼が大人の男にあこがれているという印象がもたれた。

第3日目は、朝から午後4時までの自由時間を、各グループでやりたいことを決めて一緒に行動することになっているが、天気も小雨まじりだったので、3グループとも体育館に向かった。彼とランは、対戦の同じペアになったところから、心理的に深く接近しはじめた。彼はランに、「規則にしばられてしまうことは嫌い」、「自分が計画したこの対戦表に皆が喜んでるのをみると、落ち込む」などと話していた。それからランは彼といろいろ

話をしていたが、ランは、彼の堅い信念についていけない感じや彼のペースに巻き込まれそうな感じになり、接近しすぎたと感じたことから、午後の乗馬の時から他のメンバーと遊ぶことにした。すると彼は「ランちゃんは他の子と楽しそうに遊んでいる。でも僕にはあんなふうにな人と接することはできない。どうせ僕は孤独ですから。もう放っておいてください」といい、ランの制止もきかず、牧場の柵を越えてひとりでひたすら歩きはじめた。ランはどうしてよいか途方に暮れ、りょうさんに助けを求めた。ふたりが追いつくと、彼は崖の縁に立って下方をじっとみつめており、表情は険しく、殺気だった。彼は「ひとりにしておいてください」といい、突然その崖の坂を降りだしたが、すぐに戻ってきた。危険な行動であって、見ている方をはらはらさせた。彼は「今は切れていますから」とぼつりといい、りょうさんとランは黙って、彼の気を沈めることにした。しばらくすると落ち着いたのか、宿舎に向かって歩き始めた。彼は「自分は切れると、メチャクチャ冷静になるか、乱暴になるかのどちらかです。今は冷静になる方」といった。夕食のバーベキューで彼は、男性ファシリテーターの間に入り、ファシリテーターが大学のコンパの話、お酒の話をするとうれしそうに話に加わっていた。りょうさんに対しては、「お酒を飲んでもいいですか」「意外と冷たいんですね」と笑いながら繰り返しいいていた。一時前の落ち込みはもう消えてしまい、非常に明るくなっていた。大屋敷で話しているとき彼は、としちゃんに対して「まだ子どもだ。これからもっと成長しないといけない」と批判的にいうことがよくみられた。彼は、これまで母親べったりの子であって、そのような以前の自分によく似たとしちゃんの態度が気に入らないのだろう。今彼は、大人の男になりたいと強く願って、背伸びしているように感じられる。

第4日目の最終日、午前中は色紙交換と感想文を書いた。彼は、よく話をして、笑顔が多くみられ明るかった。アキちゃんが促すと、他のメンバーやファシリテーターに自分からすすんで色紙を書いていた。荷物のかたづけや運搬を自分から積極的に手伝ってくれた。いかにも自分がファシリテーターのひとりであるかのような振る舞いであった。帰りのバスで彼は、ファシリテーターのせいこに、自分が落ち込んでいることを話した。彼は「暗い話をしてごめんね。中学の頃は、話をできる人を持たなくて、自分の殻に閉じこもっていた」といった。また昨日の逸脱行動について「僕は昨日だだをこねた」ともらしていた。大学に到着して解散になったが、他のメンバーが帰っても、最後までひとり残ってファシリテーターに話しかけて、ファシリテーターの仲間に入りたい様子

であった。最後は彼をファシリテーター全員で見送ったが、充実した満足そうな表情であった。

最終日の感想文には、女性ファシリテーターと内面的な話ができてうれしかったこと、危険な逸脱行動にファシリテーターが気遣ってくれてうれしかったこと、そして今後も数人のファシリテーターと付き合いきたいという希望が書かれてあった。

約1ヵ月後の再会ミーティングで彼は、「現在大検の塾に通っている。学校には行きたい人だけが行けばよい。学校教育はおかしい。大人は強制しすぎる。僕はそれをぶち壊したい。むかつくことが多い。皆も学校をやめてしまえばいい。親や環境、社会が悪い。自分のことは自分で責任をもってやる」と力強くいった。

以上が、ゆう君の合宿体験の全容である。そこから、彼の心理的課題がどのようなものであるか、また彼にとってこの「ヨコ体験」合宿がどのような意味をもっているのかについて考察することにしたい。

ゆう君の生活歴からは「母子密着」と「父親の心理的不在」がみられる。この2つの問題が、彼の抱えている心理的課題と密接に関係していると考えられるが、まずはその理由を「タテとヨコの均衡の崩れ」という観点から述べることにする。「タテの方向性」には、達成という意味での「上昇のタテ方向」、それは象徴的には「昇る」「進む」という言葉で表現されるようなものと、依存や従属という意味での「下降のタテ方向」、それはいわば「戻る」「帰る」という象徴的意味をもったものふたつがある。ここでは、「上昇のタテ方向」における対人関係のあり方を「上昇的タテ関係」、下降のタテ方向における対人関係のあり方を「下降的タテ関係」と呼ぶことにする。なお対人関係のあり方というのは、現実の対人関係様式であるとともに内的な対象との関わり様式の両方を意味しており、ここでは特別には区別していない。

対人関係のあり方に関して心理発達のみにた大まかな流れとしては、まず母子密着という過剰なあるいは絶対的な依存関係である「下降的タテ関係」から始まり、次に「ヨコ関係」を経て、そして「上昇的タテ関係」へとすすんでくるといえる。「上昇的タテ関係」においては「理想化」や「同一化」といった心理機制が用いられて、達成という現実原理に則した「自己確立」へと発展していくのである。このような視点からみると、ゆう君は母子密着であって、「下降的タテ関係」にしばられており、また父親の心理的不在のために「理想化」あるいは「同一化」の対象が不在であって、「上昇的タテ関係」は形成不全のままであるといえる。したがってゆう君の心理的課題は、「下降的タテ関係」からの切り離しと、「上昇

的タテ関係」の形成という2点にある。

ところで、そのふたつの心理的課題の解決のために、ゆう君にとって必要な体験は「ヨコ関係」の体験であると考えられるが、その理由は以下のようなことからである。母子の過剰な依存関係としての「下降的タテ関係」からの切り離しが行なわれるには、それと並行して「上昇的タテ関係」の形成が必要になってくる。しかし、「上昇的タテ関係」は一足飛びに形成されるわけではなく、それは「ヨコ関係」の基礎の上に立っている。「上昇的タテ関係」が形成される途上において、本人の様々な能力とあまりにもかけ離れた対象であっては「理想化」や「同一化」の心理機制の運用は困難になってくる。つまり、このような心理機制が用いられるためには、本人に比べて適度に優れた能力をもった対象がよいのである。日常的表現を用いるならば“大人が心理的にも能力的にも子どもに歩みよること”によって、それは可能となる。たとえば、腕相撲において、大人が力加減をして、子どもと対等に勝負をすることなどである。これを、子どもにとっての達成という事態としてみれば「上昇的タテ関係」になるが、実のところこれは「ヨコ関係」なのである。この事態は子どもにとって、達成という点よりも、むしろ自分自身の能力の確認と称賛という点が重要なのである。

このように「ヨコ関係」では、本人が様々な能力を試して自己確認する作業や、その能力への称賛によって達成感を得ることがなされるのである。これは本質的には、コフォートの「鏡転移」「双子(分身)転移」(丸田, 1982)でいわれているような関係のあり方、すなわち「自己の能力を映し返してくれる自己対象」と関連している。すなわち「ヨコ関係」とは、「上昇的タテ関係」へ移行するためのいわば“練習期”としてあるいはそれを支える基礎としての意味をもっており、そこでは適度に対等な能力をもった対象が本人の能力を映し返すという関係のあり方がみられるのである。

ここまでのところで、ゆう君の心理的課題には「下降的タテ関係」からの切り離しと、「上昇的タテ関係」の形成の2つがあることを指摘し、そしてその解決のためには「ヨコ関係」の体験が必要であることを述べた。そこで、これらのことが、合宿体験とどのように関係しているのかについてみていくことにする。ゆう君が第1日目、第2日目において女性ファシリテーターとのかかわりが多いのは、女性ファシリテーターに母性的な親近感を感じるからであろう。まずは依存を示して、「下降的タテ関係」から出発した方が彼にとっては安全である。第2日目の夜に、「お酒を飲ましてほしい」という彼の要求を禁止すると、「冷たいですね」という。これは、

権力によって制限を与えたかたちになってしまっている。「上昇的タテ関係」であって、彼の「ヨコ関係」の体験とはなっていない。実際飲酒を許可するわけではないが、「もうお酒が飲める歳になってきたなあ。大人に近づいたなあ」と返した方が、彼の「ヨコ関係」の体験、つまり自己の成長の確認と称賛という点で、意味があったように思われる。第3日目には、ランとの密着・依存が激しくなってきた、「下降的タテ関係」へのしがみつきが認められるようになる。しかしランは、「彼の考えがあまりにも強引すぎて、巻き込まれそうで怖い」という気持ちになって、少し心理的にも物理的にも距離をとることになった。すると彼は、抑うつ状態になってしまった。これは、「下降的タテ関係」において満たされていた依存や安全感が急にとり払われてしまったことによる「見捨てられ抑うつ」である。しかし実は、この状況をゆう君自身はある意味では覚悟していたようにも感じられる。それは、「下降的タテ関係」へのしがみつきでは、自分自身これ以上現実適応できないことを知っていて、むしろそこから切り離されることを暗黙に望んでいるからである。そして彼が一時的な抑うつ状態にありながら危険な行動を行なうことの意味は、依存や従属という安全過ぎる「下降的タテ関係」の“切断”なのである。その後彼は、何かからふっきれたように明るい表情になって、男性ファシリテーターの間に入って大学生のコンパの話をしたり酒を酌み交わす真似をしたりして、男性の仲間入りをしている。つまり、これは「ヨコ関係」の体験として意味づけられる。

再会ミーティングで述べた「学校教育はおかしい」「大人は強制しすぎる」「親や環境や社会が悪い」という彼の言葉には、あたかも「腕相撲で手加減をしない大人」（「上昇的タテ関係」でかかわる大人）に対して、不満をもって、歯向かっているように見える。彼は、いまだ自身に備わっていない「上昇的タテ関係」を否定しようとしているが、決してそれを拒絶しているわけではない。彼は、一足飛びに「上昇的タテ関係」を形成しようとしており、まずは「上昇的タテ関係」を否定することから始めているのである。

「上昇的タテ関係」を形成するには、「ヨコ関係」が

基礎として必要なのである。親、教師、大人が「上昇的タテ関係」によって彼に権力を行使し強制するだけでは、彼の「ヨコ関係」の体験にはなりえない。親、教師、大人が、あえて力を加減して彼に歩み寄ることが必要である。彼が求めているのは、自己の能力を認めてくれ称賛をくれる「ヨコ関係」としての対象なのである。

#### IV. まとめ

本合宿は、登校拒否生徒の「ヨコ体験」を中核の目的として実施され、その生徒らの心理的体験において意味ある結果が得られた。これは、合宿中と合宿後に詳細な観察記録とその検討がなされた上で見いだされたのであって、単なる行事としての合宿では何もみえてこなかったであろう。

筆者らは、本合宿をグループ体験を積極的に生かした、一つの心理発達促進的アプローチとして位置づけたいと思う。今日、登校拒否生徒の増加に伴い、種々の施設、学校などがつくられつつあるが、それらは本質的には、本合宿の提唱する「ヨコ体験」としての意味をもったものであることが期待される。

## 文 献

- Bion, W. R. 1952 Group dynamics : A re-view. International Journal of Psychoanalysis, 33, 235-247.
- 池田博和・吉井健治 1991 登校拒否に関する研究（第V報）——不登校生徒の合宿体験——名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）38, 137-154.
- 生野学園図書出版局 1992 生野学園——創立3年の軌跡とその地平——地球の子ども舎
- 丸田俊彦 1982 コフォートの自己（self）心理学 精神分析研究 26, 30-40.
- 奥地圭子 1991 東京シュレー物語 教育史料出版会
- 竹内常一 1987 子どもの自分くずしと自分づくり 東京大学出版会



ABSTRACT

School refusal pupils' experience in a camp  
—An attempt to spread horizontal human relationship—

Hirokazu IKEDA, Kenji YOSHII, Masako KIRIYAMA,  
Ikuya NAGANO, Tomoo ISHIDA and Shinji NAGAMINE

We planned and practiced the camp of four days and three nights for the school refusal pupils. The purpose of this camp is for them to acquire the experience of horizontal human relationship.

We have already considered that the basic disturbance of school refusal is a state of breakdown and withdrawal from the psychological task of development from vertical human relationship to horizontal one in the stage of adolescence, which is due to insufficient formation of 'common sense.'

10 pupils and 14 facilitators participated in this camp. 3 groups were constituted by pupils and facilitators, and 1 group was constituted only by facilitators who had a licence to clinical psychology.

We described the process in detail, investigated the group dynamics or those psychological meanings, and considered the results of their internal change by the experience of horizontal human relationship. Facilitators essentially functioned in role as horizontal human relationship and then it has expanded into members.

We can conclude that this sort of camp is one of important approaches for school refusal pupils' psychological development.